今日のポール・ニザン

ポール・ニザン著作集　別巻2

ジャクリーヌ・ライナー他

浦野衣子訳

訳者について
浦野衣子（うらの・きぬこ）
一九三四年大阪府に生まれる。
著書―『サルトルとその時代』（共著、人文書院）
訳書―ファノン『地に呪われたる者』（共訳、みすず書房）ドブレ『国境』ニザン『トロイの木馬』（晶文社）

今日のポール・ニザン――ポール・ニザン著作集別巻2

一九七五年五月一〇日印刷
一九七五年五月一五日発行
著者ジャクリーヌ・ライナー他
訳者浦野衣子
発行者中村勝哉
発行所株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一二
電話東京二五五局四五〇三
振替東京六二七九九
堀内印刷・美行製本
ブックデザイン平野甲賀
©一九七五年〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

今日のポール・ニザン

ポール・ニザン著作集別巻2

晶文社

ATOLL, No. 1, issue specialized in Paul Nizan
(French quaterly magazine
directed by Jean-Pierre Barou)
Original Copyright © 1968
by ATOLL, Paris
Japanese Copyright © 1975
by Shobun-sha Publisher, Tokyo
Japanese translation rights arranged through
Orion Press, Tokyo

今日のポール・ニザン　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

ニザンあるいは不快感　イヴ・ビュアン　11
ポール・ニザンは密告者ではなかった　ルイ・マルタン＝ショフィエ　33
妥協の道　modus vivendi　ベルナール・ベニエ　42
ピランデッロふうの肖像　同時代人の見たニザン　ジャクリーヌ・ライナー　86
裏切者の役目　ジャン＝ジャック・ブロシエ　120
ひとつの政治散歩　ポール・ニザンとともに　アリエル・ガンスブール　130
モスクワへの旅　クララ・マルロオ　170
ある小説家の死と生　ジャン＝ピエール・バルー　176

公開状　アンリエット・ニザン　208
訳註　215
訳者あとがき　267
II〈資料〉
①現代フランス文学の諸傾向　ポオル・ニザン　271
②ジイドとロマン・ローランへの抗議　ポオル・ニザン　293
③仏国文壇人に訊く「世紀の話題——西班牙と露国」（座談会）　303
④ポオル・ニザンと語る　アンドレ・ユルマン　314
日本におけるポール・ニザン　長田弘　316
ポール・ニザン年譜　335

今日のポール・ニザン

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ニザンあるいは不快感

イヴ・ビュアン

「不快感をとり去ってしまえばもう芸術はなくなってしまう」
J＝P・サルトル
『クラルテ』一九六四年三＝四月号*

ある作家たちにとっては、生（かれらの生）は遠方のざわめきと区別のつかないものであるが、他のある作家たちにとっては、逆にそれは本質的な現前である。前者は、当然、かれらが濁った溜り水と名づけわれわれが体験と名づけているものに対して無関心になる。

後者は、おなじく当然のことであるが、自己の状況、すなわち世界への現前であり歴史への関連としての自己の状況を、心理学的にであれ歴史的にであれ理論的に理解するだけでは満足しえない。かれらにとって問題なのは、自己のものであるその偶然の生を**書きなおすこと**（おそらくは生きなおすこと）、またたぶんそれを仮装させ、まさにそのことによってそれを秩序立てることなのである。言

葉というあの稀有な真珠は、一般に受けいれられている見解とは逆に、このひとたちのもの、ニザンのものだ。歴史がまどろみ炸裂する場としての、罠であり造物主（デーミウルゴス）である言葉は。

このようにして、ニザンの芸術はエクリチュールとともに始まる。だがこのエクリチュールはどこから生まれるのか？　それは〔われわれを〕なにに送りかえすのか？　本書では、この第二の問題についてはふんだんに論じられている。したがってここでは、この二つの問題がたがいに他を前提とするものであることを忘れないようにしながら、第一の問題にだけ関心を寄せることにしよう。冒頭のエピグラフが示しているように、ニザンの作品は、すべての芸術と同様、**不快**感から出たものであると思われる。そこでわれわれは、この不快感の特徴を描きだすことに専念するだろう。（**考える**存在、**行動する**存在としての）ニザンとそのエクリチュールとのあいだには全的な共謀が存在する――それについて証言しうる作品はわずかしかないが――のであることに注意しながら。その結果確認されるのは、歴史的な歪みでもあり深い裂け目でも孤独感でもあるかれの不快感が、かれの言葉をある力で充たしており、その力がかれの言葉にあの非凡な未熟さ〔辛辣さ〕を付与しているのだということ、そしてこの非凡な未熟さゆえに、その言葉は、三十年以上も経った今日、われわれにとってきわめて同時代的なのだということである。

＊

「話すこと？　それには話しかける相手と、口にすべきことがらとがなければならない。ぼくは、自分が、生者の鈍化した目には最大の倦怠と見えるものについての、つまり死についての異常な警告の

声に充たされているのだと思う。ぼくは他人より強いわけじゃなく、虚無というもの、ぼく自身の未来の虚無、ぼくの虚無――虚無はその所有の観念とはあいいれないものだが――を理解することはできない。だからぼくには、自分の死んでいる姿は不完全にしか見えない、ぼくに想像できるのは、毀損された生存なのだ。まったく、ぼくはアキレウス以来たいして進歩してないんだ。*」

第一歩から、かれと世界のあいだには不透明な幕がある。かれが歩くことを許されている土地には、かれのすべての歩みを支える力はない。樹々は、そこでは、成長をよそおってはいるものの、立ち枯れている。霧が晴れてみると、このひからびた土地にひろがる風景は、カミュが垣間見たシジフォスの地をおおう風景同様、ひとを安心させるようなものではなさそうだ。「水のない異様な風景の土地がある……*」　ニザンは、なによりもまず、この形而上学的地方を旅するのである。そのことをかれが否認しようとすまいと、勝利した思想家としてであれ敗北した思想家としてであれ。かれは、このきわだって探険家タイプの顔つきを見せる。灰色の顔、死に親しむ者の鉛の苦悶。またこれと相関的に、きわめて早くから、かれの念頭にあるのは、夜については暗鬱な夢、昼については女たちへのあやふやな接近だ。

とすれば、絶望を、つまり不治の後遺症を持つあの幼時の病い、あの潜行性の苦痛を思いおこすべきであろうか、さもなくば希望の不在を、つまり人間を喰いものにし、人間を息切れさせ、どうしようもなくやつれさせ、ついには滅ぼしてしまう――だが痛みは感じさせずに、こっそりと、死期の来ぬうちに――かの腐生菌の宿主である固定膿腫を。絶望はしばしば行為に導く。締めつけてくる鉄の輪を打ちくだくための、防禦の行為か、攻撃の行為に。希望の不在のほうは黙々と成長し、忍従を、

嘲弄を呼びおこす。だがやはりこの両者〔絶望と、希望の不在と〕の一方は、しばしば他方の仮面でしかないと言わなければならない。「こうしてひとは生きていく。ときどき、平穏な生のなかの裂け目のように見える行動へと引き込まれながら。その生のしずけさは、おそらくは、希望の不在の連続にすぎないのだろうが。*」ニザンに滲透しているこの相反並存的（アンヒヴァラン）な流動状態はつづく。かれはそれを、つねに変らぬものとして生きる。この永続性の根拠をどこに求めるべきであろうか。たんに幼年時代のうちにか、それともそのかなた、意識形態（イデオロギー）の深い根のうちにであろうか？

二十歳のニザンのイデオロギー、具象化されるべき書物を求めているそのイデオロギーは、かれが理解してもらいたいと思っているその当の人間たちからけっして完全には承認されない、くらい、ぼんやりした色調をおびている。かれの絶望、この口ごもりがちな分身、かれの思考のこの寄生者は、かれには、どんな香油をもってしても追いはらうことのできない亡霊のように見える。それは、かれの思考の道筋にぽっかりあいた穴ぼことして姿をあらわす。それはひとつの鏡だ。ニザンはそこに自己を凝視する。二十歳のかれにとって、人間は——哲学はそのなにものをも変えはしないだろう——むなしく動きまわり再生しつづけるおぼろげな影にとどまっている。ひさしい以前から、世界は正当化しえぬものであり社会はそこから由来するものである。この公準をどこから得たのか、ニザンがそれを正確に知ったことは一度もなかったが。不可避的に諸大陸は沈没する。人間たちももろともに。希望の暦を——あるいはさまざまな贋の希望の密輪を——是認しないすべての思考に対して、ひとつの結論がおしつけられる。冒険には出口がないのだという結論が。希望（のぞみ）無き者は、そこで、滅亡（ほろび）のラディカリズムに同意する。かれをとりまくものはすべて、死にむかって開かれた扉をかたどっている

のだ。「……このよろこびのない世界は、まもなく立ち去ろうとしている国に似ていた。*」

だが人間のうちにはイデオロギーの混乱や理性的要求しかないわけではない、と断言してもいい。幼年時代とはひとつの秘密であり、**すべてはそこに端を発する**のだと言ってもいい。ピエール・ブロワイエは、生まれおちるとすぐ、ひとつの使命を負わされる。一個のくらい〔目立たない〕悲痛な生が、かれに、光り輝く運命をゆだねるのだ。「アントワーヌはふと考える、『息子がかたきをうってくれるだろう。』というのは、アントワーヌは、いろいろと復讐せねばならぬ男であり、その生において開花することのなかった、自分では自分の生に復讐できないことを知っている男であるからだ。*」

たしかに光り輝く運命ではあるが、その額にはやはりひとつの赤い痣が――やりそこなった、浪費され、終ってしまった別なもうひとつの生の跡が――残っていて、贖罪という徳行は高いものにつくことを思いおこさせるのだ。いずれにせよ、贖罪者たらんとするはたやすいことではない。かれは過度の純粋さ、過度の無垢を妙なぐあいに身につけ、型の完成を過度にねがう。贖罪者は魔術師に似ている。かれは生を変えようとのぞむのだ。かれの承認する唯一のたたかいの場において、かれはさまざまな痕跡に立ちむかう。かれはさまざまな影を征服する。だがかれのしぐさは幻影だ。アントワーヌ・ブロワイエがたぐいまれな驚異の生まれるのを見るそのところに、ひとびとはひとりの隠者ひとりの世捨人が成長していく姿をしか見ないだろう。ひとびとはかれを避けるだろう。

幼年時代に獲得され青春時代に確かめられた絶望。こうした不確実な由来の詮索などどうでもいい、ニザンが書くことを決意した時点では結果はおなじことなのだから。不吉な呪詛がピエール・ブロワイエとニザンにとりついているのだ。かれらには、メルロー＝ポンティが『シーニュ』のなかで語っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com